父を超える酪農家を目指して

北海道名寄産業高等学校 酪農科学科 3年 円谷 優斗

私の家は北海道天塩郡豊富町で経産牛約７０頭、育成牛約３０頭、草地面積約３０ヘクタールを持つ中規模の酪農家です。北海道でも有数の酪農地帯である我が町で生産される豊富牛乳はブランド力も高く、全国的な販売を行っています。生まれたときから酪農は私にとって最も身近な仕事でした。しかし、私は、中学生の頃まで酪農という仕事に全く興味はなく、手伝うこともほとんどありませんでした。今思えば「酪農なんて簡単でやりがいのない仕事」、そう感じ、心のどこかで家が酪農家であることに劣等感を感じていたのかもしれません。しかし、高校の進路選択で迷っていたある日、私に父が「まずは酪農を手伝ってみないか」と言ってきたのです。父が毎日簡単に仕事をこなす姿を見ていた私は、「こんな作業なら自分にも簡単にできそうだ」と安易に考えていました。しかし、実際に手伝ってみると朝の搾乳開始から夜の搾乳終了まで少しも休みはなく、体力的にもとてもきつく、投げ出しそうになったのを今でもよく覚えています。また、牛は人をよく見ている動物であり、素人の私が作業をしても中々言うことをきいてくれません。しかし、父が同じ作業を行うと牛はまるで言葉が分かるかのようにすんなりと言うことを聞くのです。私はその時初めて父と私の間にある、圧倒的な技術の差と、牛にかける愛情の差を感じ、愕然としました。そして、トラクターに乗り作業をする父の背中に、酪農という仕事の中にある責任の重さと充実感、そして仕事に対する誇りを見ました。

「父の後を継いで、絶対に父を超える酪農家になる。」そのとき私は、そう強く決意したのです。

しかし、私自身、酪農に関する知識や技術に乏しく、このまま何となく高校に進学し、就農してもただ作業をこなすだけの経営者になってしまうのではないかと考え、地元を離れ、本格的に酪農の勉強ができる名寄産業高校の酪農科学科への進学を決めました。

高校での学習を進めるにつれ、父を超える酪農家になる、その目標を実現するための、私なりの経営ビジョンはあるものの、そこには大きな超えなければならない壁があるのを実感しました。それは、経営の安定と、先進的な設備の導入費用の問題です。私は、今よりも頭数を増やし、規模の大きな牛舎を作りたいと考えています。しかし、我が家の酪農経営は現在決して安定しているとはいえません。我が家だけではなく、現在の酪農家は大変な状況に立たされています。牛乳の自給率は国内で100％まかなえてはいるものの、輸入に頼る飼料費は上がり、燃料代も高騰しています。しかし牛乳の買い取り価格は今年、約3円ほどの上昇は見られたものの、まだまだ収入は年々落ち込んでいるのが現状です。これから酪農業で収益を上げていくためには、餌の改善だけではなく牛舎環境の改善が必要なのではないかと考えるようになりました。我が家でも、乳房炎にかかる牛がゼロというわけではなく、経営の中で治療費は

大変な負担となっています。牛舎環境を改善することが、病気にかかりにくい健康で良質な乳牛を生産し、治療費の軽減、延いては乳量の向上につなげられるのではないかと考えています。そこで私は現在、高校のプロジェクト学習で牛のストレスについて研究を行っています。高校での学習を通じて、牛は人間よりも臆病で、人間が起こす些細な行動でもストレスを感じていることが分かりました。

そこでまず１点目に私は、生育環境のストレスである牛のベッドの改善に着目しました。衛生的な牛舎環境を整備することで、牛のストレスが軽減され、乳質が安定したり、乳房炎などの病気が減り、治療費が軽減されるなど、経営において多くのメリットがあると考えています。現在は建材屋から出るおがくずや、紙ゴミなどを活用し、牛のベッドとして使用し、ハエの発生数や乳量に変化があるのかを検証しています。また、廃棄物を使用することで、無駄な経費がかかることなく、実践できるため普及もしやすいのではないかと考えています。現在調査を継続中であるため、結果はこれからのものとなりますが、生育環境を改善するのに有効な結果が得られる手応えを感じています。

また、２点目に着目したのは気温におるストレスの推移です。暑熱環境下では牛の生産性は低下してしまいます。地球温暖化の影響もあり、暑熱対策はこれからの酪農経営にとって、生産性を向上させるためにも重要な課題となってくるのではないかと考えます。そこで、牛舎内にヒートストレスメーターを設置し、牛舎にあの気温から、具体的な数値で牛のストレスを計測しています。牛舎内の気温を低下させるための換気の実施だけではなく。スプリンクラーを使用した、気温低下を実践し、ストレス度を計測しています。このように、学校でしかできない実験的な検証を数多く実施し、失敗を重ねながらも、将来の経営に組み込むことができるストレスの軽減方法を模索しています。

私自身、学校において研究を重ねる中でわかったことは「牛の生態を正しく理解することが、経営改善につながる」と言うことです。当たり前のことですが、増収、増産に目を向けるあまり、実はこの当たり前のことを落としがちです。牛は本来野生動物であり、その野生動物を人間が飼養している、実はその時点で、牛にとって大変なストレスがかかっていること、また、自然にない音や人間の動作にひどく敏感で、臆病な動物であること。我が家は個体管理をしやすいようにつなぎ飼いですが、父は牛舎で大きな声を出して、牛を自分の思うように動かしたり、蹴って牛を立たせたりすることはありません。以前、父に「なぜ立たない牛を蹴って立たせたり、大きな声を出して動かしたりしないのか」と尋ねたことがあります。しかし父は、「牛は生き物だからだよ」とだけ私に教えてくれました。今ならその父の言葉の意味が分かるような気がします。人間から見ると言葉の通じない牛に分からせるために蹴ったりすることはよく見られる行動です。しかし、本当に生産性を向上させたいと考えるならば、牛のストレスを最大限に取り除いてあげることが、最善であることを父は分かっていたのでしょう。しかし、我が家の

牛舎では完全に牛のストレスが軽減されているわけではありません。父の配慮が最大限に生かされ効果が発揮できるように、私が将来継ぐときには現在の我が家の経営で改善が必要な環境の整備を実践していき、更に牛にとって、野生の状況に近くのびのびと過ごしやすい環境に改善していきたいと思っています。

今の酪農を取り巻く環境はとても険しいものです。しかし、いつかは絶対に今より多くの人が私のように、酪農という仕事が「かっこいい仕事」「なりたい仕事」と感じてもらえる時代が来ると信じています。だから私は自分の考える未来を実現させるため、酪農という仕事の本質と向き合うこと、そして新しい技術に触れ、失敗を恐れずに前に進むこと、そして何より、牛の生態を正しく理解すること、この精神を忘れずに酪農業に向かいます。酪農は大変な仕事なのではなく、日本の食料生産を支える重要な仕事であり、牛の声に耳を傾けることができる唯一の責任ある仕事なのです。将来は「父の後を継いで、絶対に父を超える酪農家になる。」この夢を実現させます。